

ショートカット

佐鳥 理

右手にペンを持ち、ルーブリーフに意味のない言葉を書きなぐる。見開き一ページ埋まってしまいそうな文字の羅列を、あたしはぐちゃぐちゃに塗りつぶした。

いくら書いても、破れるほど乱暴にそれを消しても、心は変わらずざわついている。

バインダーを閉じて静かに席を立った。教室を出るまでのあいだに向けられるのは、好奇の入り交じった哀れみの目。

かわいいそうな子のレツテルは便利だ。あたしを簡単にひとりにさせてくれる。

廊下に出て人の目から逃れると、窓枠に手をついて大きく息を吸い込んだ。空に浮かぶコンクリートの輪郭から、エメラルドの海が顔を出している。

昔誰かが言っていた。海が青いのは空の色を映しているからだ。あたしはここにきて、

その言葉に疑いを持った。この島の海は水蒸気をたっぷり含んだ空よりも、遙かに青い。窓枠に肘をつき、湿った風に身を委ねていると、

「またさぼり？ 川満瑠花<sup>かわみつる</sup>」

背中に低い声がかぶさって振り返った。ひとつ後ろの席の遅刻常習犯、梶原律<sup>かじわらりつ</sup>だ。

毛束感のある重めのフロント、地肌が透けるほど短く刈られた耳回り。すらりとした体つきによく似合う、涼しげな目元に惹きつけられる。

「変な髪」

彼は表情のない声でつぶやいて、あたしの反応すら待たず、教室に入っていく。

胃のあたりに絞られるような痛みを感じて、あたしはその場にしゃがみ込む。髪に何度も指を通した。あご下で切り揃えていた髪はすっかり伸びて、肩の上ではねている。

ほんとうは、先月には短くなっているはずだったんだ。心の中で言い訳すると、口の中

に苦いものがこみ上げてくる。

先月、美容師だった母が病気で突然亡くな  
って、あたしは中学を卒業するまでの半年と  
少しの間、この島で暮らす祖母の家に身を寄  
せることになった。ここに来て一週間。あた  
しはまだ気持ちを切り替えられずにいる。

授業終了のチャイムが鳴る。クラスメイト  
の砂川実優すなかわみがあたしを探して廊下まで来た。  
すぐ隣にしゃがみ込み、優しく背中をさすっ  
てくれた。

「瑠花、大丈夫？」

「なんか調子が悪くて」

「無理しないで保健室いこ。次の授業の先生  
には、ちゃんと覚えておくから」

「ありがとう。あのさ」

教室からぞろぞろと生徒たちがあふれ出し  
てくる。あたしは声を抑えて実優に訊いた。

「梶原律ってどんな人」

「もしかして、なんか言われた？」

実優が不安げに眉根を寄せた。

「気にしなくていい。律は空気読めなくて、思ったことなんでもずばずば言ってしまうんだ。悪いやつじゃないんだけど」

「本音ってことか。あたしの髪、変？」

「そんなことない。ただ、律は他人の髪が気になるんだと思う。家が美容室なんだよ、海の近くにあるんだけど」

それから実優は微笑みながらも視線を逸らして、会話をにごした。あたしの親が美容師だったということを出したのかもしれない。

とりあえず行こうか、と実優はあたしに手を貸してくれた。けだるそうに廊下に出てきた律と目が合った。また何か悪態が飛んでくるかと思ったけれど、彼は黙ってどこかへ行ってしまった。

学校が終わると、あたしは海に向かってぶらぶら歩いた。

コンクリートの四角い建物と熱帯植物の並

ぶ、代わり映えのしない道。市街中心地を通り越し、気の向くままに折れていく。

制服は島の子どものわかりやすい目印だ。ときどきすれ違う大人が、あたしに声をかけてくる。東京では隣に住んでいたアパートの住人とさえ口を利いたことがなかったのに、この島では見知らぬ人でも遠い親戚のような距離感だ。

お土産屋やダイビングショップ、いくつものホテルを通り越す。街路樹に椰子の木が混ざって、足を速める。丁字路の先に海が見えた。

海沿いの道を辿っていると、真新しい看板の美容室が目にとまった。バード・オブ・パラダイス。入り口に置かれたキャスターつき  
の巨大な鉢では、鳥の姿を思わせる、極楽鳥  
花が咲き誇っている。

ここが律の家の美容室だろうか。なんとなく  
く気になって海のほうまで来てみたけれど、  
確証はない。目を細め、一面ガラス張りの店

内を覗いてみた。

アースカラーを基調にした落ち着きのある内装だ。セツト面が二つとシャンプー台が一つある。店員はひとりだ。黒縁眼鏡にストラップシャツ、黒の細身パンツを合わせた三十代くらいの男の人が、あたしと同年代の女の子の髪にドライヤーをかけていた。

仕上げに薄く伸ばしたヘアクリームをつけると、艶のあるボブスタイルができあがる。彼女はその髪型が気に入ったのか、晴れやかな笑みを浮かべていた。

立ち上がって全身を確認する姿を眺めていると、待合のソファに座っていた連れの友人らしき女の子と目が合った。彼女は慌てたようすで表に出てきた。

「川満さんですよね、転校生の」

あたしは驚いた。同じ中学校の子だろうか、見覚えのない顔だ。

「わたしたちがここに来てたってこと、言わないで」

彼女が誰かは知らないけれど、あたしがそれを言う相手もない。あたしが頷くと「ありがとう」と手のひらを唇の前で合わせて、彼女は店の中に戻っていった。会計中の友人とこちらを見ながら何かを話している。

この場を離れようと踵を返したとき、もう一度扉が開く音がした。後ろから靴音が追いかけてくる。

また口止めをしに来たのか。振り返ると、美容師の男がそこにいて拍子抜けした。

「川満さんでしょ」

彼はあたしに微笑みを向けながら手招きしてきた。あとから店を出てきた女の子ふたりが、念押しするように視線を投げて、通り過ぎていく。

「ちよつと寄っていかない？ 律からも話を聞いてたから、気になってて」

警戒していると、彼は聞き覚えのある名前を口にした。

「律って、梶原律？」

「川満さんの後ろの席にいるはず」

彼は扉を引き開けて、どうぞ、とあたしを店の中に促した。足を踏み入れたときのツンとした薬剤の香りが懐かしい。

落ち着かないあたしに彼は「ユウさんでいいよ」と、くだけたようすで名刺を渡してきた。極楽鳥花の鮮やかなイラストの中に白抜き文字で、梶原祐介かじわらゆうすけと書いてあった。

あたしは勧められてソファに座った。

「一週間だとまだ慣れないでしょ、みんながどこかで繋がっているかんじが。律なんて世間話が苦手だから未だに苦戦してるけど」

愛想のない律と違って、彼はよく笑う。いったん奥に引っ込んで、ユウさんはよく冷えた月桃茶を持ってきてくれた。

「さっきの子たちに、ここに來てたこと言わないでって、口止めされました」

「うわさになるのが嫌なのかもね」

「どうしてですか？」

率直な疑問を口にしてみる。



「僕らもこっちに移住してまだ一年なんだ。僕は仕事で東京に行くことも多いから、島の人たちに広く受け入れられているとは言いがたいし、律も素行がよくないからなあ。夜中まで作品づくりをしてるから、朝は起きられなishね。いつも隣の家の人が気にかけてくれるから、だいぶ助けられてはいるんだけど」

ユウさんは目尻を下げて苦笑いする。

「あの、作品づくりって？」

律も移住者だったということや、素行の善し悪しよりも、あたしには作品づくりの方が気になった。

「持ってこようか。見たほうが早いから」

言いながら彼は折り返し、材料部屋に入った。そこから持ち出したものが見えた瞬間、思わず声を上げてしまった。

「すっごい派手髪」

テーブルに置かれたのは、女性の顔がついた練習用のウィッグだ。ユウさんはあたしのすぐ隣に座った。

「振り切ったかんじが、律らしいなと思ってるんだけど」

あご下五センチのミディアムを何度か脱色したのだろう、髪色は白に近い金髪だ。耳の下から襟足までの髪の内側は、カナリアのように鮮やかな黄色に染めてあり、髪を揺らすとちらちらそれが見え隠れする。

「これきつと、髪の手結んだら内側の黄色が目立ってかわいいですよ」

「さっき来た二人は『ありえない』って反応だったなあ。律のこと聞きたがるから、見せてみたんだけど」

「あたしは奇抜な髪にあまり抵抗がないのかも。母が美容師だったんです。家にはいつも美容専門誌があって、子どもの頃からこういうの見てたから」

「もしかして将来は美容師に？」

「たぶんならないです。大変そうだし」

「そうかあ、今からスカウトしておこうかと思っただのに」

話が弾みだしたころ、ガラス扉がぎいと揺れた。律だ。中に入ろうとしてあたしに気づき、すぐにどこかへ行ってしまった。

「逃げたか。ほんとうは川満さんと話したいんじゃないかと思うんだけど」

「律くんは、あたしのことなんて？」

「川満瑠花の髪を切りたい、って。それくらいだけど、普段は訊いたって学校のことなんて話さないから、何事かと思ってしまった」

ユウさんは笑いをかみ殺している。あたしは肩に垂れた、伸びっぱなしの髪に触れた。

「まだ切りたくないんです。これは今のあたしを支えている、唯一のものだから」

「その話、気になるね」

口を開きかけたとき、次の予約か、幼い子どもを連れた女の人が入店してきた。

仕事の邪魔をするわけにはいかない。あたしは「また今度話します」と月桃茶を飲み干して立ち上がった。

「別にうちで髪を切らなくてもさ。また遊び

「おいでよ」

ユウさんはあたしに明るい笑みを向けてくれた。

お礼を言ってから店を出ると、外はだいぶ日が傾いていた。

潮の香りに、海を目指して歩いてきたことを思い出して、ビーチへ向かった。道を渡って、抜け道のように細い石段を降り始めると、目の前に海が広がった。市街から近いからか、地元の人だけではなく、海の写真を撮りにきた観光客も多い。

あたしは四つの柱に屋根をのせただけの、風通しの良い日よけの下に入った。コンクリートのベンチがいくつも並んだそのひとつに、ぽつんと海を眺めている学生服姿の男の子を見つけた。

あたしは彼の隣に座った。

「さつきカナリアのウィッグ見せてもらったの」

なんと呼んだらいいのかわからないまま声

をかけると、律は振り向いた。

「あたしは好きだよ」

訝しげな目であたしを見つめ、それから律は行ってしまった。きつとここであたしが店からいなくなるのを待っていたのだろう。

優しい波の音を聴きながらしばらくのあいだ海を眺め、空が赤く染まり始めるころ帰宅した。祖母はまだ仕事から帰ってきていない。

自室としてあてがわれた六畳の和室に入つて襖を閉じた。祖母が朝晩かさず祈りを捧げている神棚が目に留まる。祖母に倣つて手を合わせてみる。

母が死んだとき、ほんとうは離婚した父があたしを預かるはずだった。けれど祖母が強引にあたしを引き取った。それは神さまが決めたことらしい。

あたしはあのかき、東京に残りたかった。どこの高校を受験するのかをもう決めていたし、地元の友だちとも離れたくなかった。

でも今は強引に連れてきてもらったことを

感謝している。新しい家族と暮らす父の保護  
下に入れば、あたしはひとりアパートに残  
ることを決めただろう。母と過ごした日々  
の染みこんだあの場所に残されていたなら、き  
つと悲しくて仕方なかったに違いない。  
いつかは母に切ってもらったこの髪も、誰  
かに切ってもらう日が来るだろう。それまで  
にあたしは、自分の足で立てるようにしなく  
てはならない。

「ただいま」

玄関から祖母の音がする。あたしは襖を開  
けてリビングで出迎えた。

「おかえり」

祖母は買い物袋を玄関におろして、靴を脱  
いだ。頭の後ろで一つに縛っただけの長い髪  
が、くたびれたように胸元に垂れている。冷  
蔵庫に食材を詰めながら、祖母が訊いていた。

「瑠花、今日学校終わったあとどこ行って  
た？」

「なんで？」

「いいから、どこ行ってた」

口調が明らかに厳しくなった。

「海の方まで行ってた。近所に何かあるのかすら、まだ全然知らないから」

「美容室行ってただろ、極楽鳥花の鉢が置いてあるところ」

あたしにはそれが、ユウさんの店に行くのが悪いことのような言い方に聞こえた。

「同じクラスの子の店だよ。後ろの席の男子」

「髪切るならよそにしな。同じ学校の子もたくさん行ってるよあるから」

「すごく優しそうな人だったよ。カットだつて上手いし」

「あの店じゃなくても、上手い美容室ならたくさんある」

「なんでだめなの」

同じ学校の子だって来ていたのに。言おうとしてあたしはぐっと押しとどめた。祖母は唇をきつく結んだまま、あたしのことを睨みつけている。

移住者の店だからだめなのだろうか。それを言うならあたしだってよそ者だ。納得がない。

母は中学を卒業して島を出てから、一度きりしか帰らなかった。祖母はその理由に気づいているのだろうか。

母は以前、きまりごとを祖母に押しつけられるのが辛かった、とこぼしたことがある。苦しみを周りの大人に相談すれば、それが祖母の耳に入ってしまう。だから怖くて誰かに本音話すこともできなかった、と。母はほとんど島の話をしなかったから、あたしはその言葉をよく覚えている。

「瑠花」

「わかったよ」

あたしは部屋に入って襖を閉じた。

言葉を飲み込むほどに、みぞおちの辺りが重くなっていく。

ここに来たのは、神さまが決めたこと。それならば神さまは、あたしに何を望んでいる



というのだろう。

バード・オブ・パラダイスで会った下級生たちのうわさは、翌朝にはあたしの耳にも届いた。彼女の新しい髪型は「これまでよりも断然かわいい」と、ちよつとした話題になっている。「いつもの美容室で、写真で見せた髪型にただけ」と言い張っていたらしいけれど、誰も信じていなかった。

「律の店行ってたってうわさだけど、どう思う？」

実優はあたしに訊いてきた。あたしは首を傾げて「さあ？」と素知らぬふりをした。

なんだかんだでみんな、可愛くなることに関心があるのだろう。後ろの席には真相を確かめようとする女子たちが詰めかけているが、律は「しらね」と興味がなさそうだ。

予鈴が鳴って取り巻いていた女子がいなくなるのと、後ろから律に肩を叩かれた。昨日は散々無視されていたから、あたしは驚いてし

まった。

「使っているよ、おれの」

律は社会の授業で使う副教材をあたしに押しつけてきた。

「助かるけど、これがないと授業困らない？」

「寝るからいい」

大あくびして机に突っ伏すと、律はそのまま動かなくなった。そういえば昨日ユウさんが、律は夜中までウィッグを作っていると言っていた。

大丈夫だろうか、受験生。心配になってくるけれど、あのカナリアのどこに手を加えたのかを想像するのは楽しかった。

後ろからは、規則正しい寝息が聞こえてくる。

授業中自分のノートを取りながら、律の教材に書き込みをした。テストには教科書を丸暗記しただけでは点が取れない問題があるから、少しは役に立つはずだ。

チャイムでようやく目を覚まし、号令が終

わると律は大きく伸びをした。

「書いといたよ。先生の言ったこと。テスト前になったら一応見ておいてね」

「それまで持ってた」

「なにそれ。あたしの鞆が重くなるだけだし」

あたしは無理矢理、律に教材を押し戻した。

翌日から、律が寝ているときは机の上から教材を勝手に取って、代わりに書いてあげることにした。他人の教材にできる限りきれいな文字を書く。決まったことを書くだけなのに、そうしているとあたしの心の中まで整っていくような気がした。三日も経つころには、ノート係も悪くないと思い始めているのがおかしかった。

部活動に向かう生徒を横目に、帰宅を急ぐ律を捕まえて、あたしは問いかけた。

「ねえ、作品づくりはどうなった？」

「話してもわからないでしょ」

あたしは足を速めて横に並ぶ。

「わかるよ、うちのお母さんは美容師だった

から」

「過去形か。辞めたんだ」

「死んだの」

一瞬律の足が止まった。

「そう」

それから彼はあたしに合わせて歩みを遅くした。言葉を選ぼうとしているのだろうか、表情はいつになく硬い。

「おれも親はいないようなものだけど」

そのつぶやきに、あたしは思わず振り向いた。

「ユウさんは？」

「あの人はおれの叔父。父親の弟だよ」

かわいそうな子はあたしだけじゃなかったということだ。今度はあたしのほうが、彼の事情にどこまで突っ込んでいいのかわからなくなってしまった。

道の分岐点に着いて足を止める。

「これから美容室行くけど、瑠花もくる？」

律はあたしの目を覗き込んできた。

今日と明日、ユウさんは講師の仕事で東京まで行っているらしく、美容室は休みだった。店頭にあった極楽鳥花はしまわれて、ガラス窓にはブラインドが下ろされている。

律は鍵を開けて店に入った。鞆を置いて待合のソファにあたしを座らせると、材料部屋からスケッチブックを持ってきた。

「いつも先に、イメージを絵にするんだけど」  
ペンで一気に描き上げたのだろう、迷いのない線で女性の顔が描かれている。折り重なる波のように、髪が交互に面をつくり、毛先は左に流れて飛沫のように散っている。その人に似合わせるための髪型というよりは、人間を土台にして作ったアートとかんじだ。

「ここから見える海みたいな青。それで台風みたいな頭だね」

もしこの髪型の人が街を歩いていたら、それがファッション最先端の場所であったとしても振り返るに違いない。

「あたし、人間も自然の一部なんだなあって

思った」

「結局それは良いの、悪いの？」

「良いに決まってる。あたし、褒めてるんだよ」

力を込めて言うのと信用してくれたのか、律は絵の中に描いた青を、ウィッグに再現するための手順を詳細に話し始めた。

普段は無口なのに髪の話になったとたん、言葉があふれ出す。これがもし他のクラスメイトだったらまったりとくついていけなかっただろう。あたしに美容の知識を植えつけてくれた母に、感謝しなくてはならない。

「そういうえば律、変な髪ってどのへんが？」

「何の話？」

「前に廊下で言われたんだけど。あたしの髪」

「ああそれ。重心が下がってるから」

骨格と髪のバランスについて語る律に、もう四ヶ月放置していることを伝えると、あたしが元々どんな髪型だったのかを言い当てた。

「瑠花の髪を切った人、上手かったんだと思

う。そうじゃなかったら元の形なんてわからない」

これまで母に切ってもらっていたとは言っていない。だからあたしは律のその言葉が素直に嬉しかった。

「今度瑠花が髪を切るときは、おれがやる」  
律はまるで自分のものだというように、遠慮なく髪に触れてきた。あたしの意見などお構いなしだ。心がひとり立ちできるまでは切らない。そんなあたしの覚悟を簡単にさらってしまいそうになる。

あたしたちは待合のソファで、何時間も語り合った。

律は淡々と両親のことを話してきた。不意に知ってしまった母の不倫。夫婦の間で黙認されていたそれを、律が深く追及してしまったことが、家庭を壊す引き金になってしまったそうだ。状況を知ったユウさんが預かることになり、律と一緒にこの島に来たのが一年前。

ユウさんは講習会の仕事も多く、お客さまも抱えていたはずなのに、なぜこの島に店を構えたのか。律はわからないと首を傾げていたけれど、あたしにはその理由がわかるような気がした。

いつも誰かが家族のように見守ってくれるこの島の環境が、律を温かく包み込んでくれると考えたのだろう。ユウさんは心に傷を負ってしまった律を、守りたかったに違いない。

律はいつも自分に正直で、感じたことを真っ直ぐ伝えようとする。自分の心に嘘をつくことができないのだ。不器用さを暴力のように感じて、傷つく人もいるかもしれない。けれどあたしには、周りの何にも惑わされることのない、律の心の素直さがただ眩しかった。

「決めた。夏休みになったら、あたしの髪やってくれない？ それまでにどんなのがいいか考えてよ」

「さっき何も言わないから、おれじゃ嫌なのかと思った」



「あたしの髪をさわるのは、律がいい」

不安も不満も分ち合いたい。この気持ち  
は、いったいなんと呼ぶのだろう。

夏休みに入ると、ユウさんが仕事で島を出  
た日を狙って、あたしたちはさっそく美容室  
を使った。

鏡の前に座ってカットクロスを着ける。律  
はあたしの覚悟を揺るがすようなことは一つ  
も言わない。何の迷いもなく髪を分け取って、  
鋏を入れた。髪が一束落ちるたびに、背負い  
こんでいたものが切り離されて、心が軽くな  
る。

「律」

あたしは名前を呼んでみた。けれどその声  
は集中している彼の耳には届かない。

律は髪の毛一本のゆくえにまで、強いこだ  
わりを持っている。美容師というよりは、芸  
術家だ。命が削れてしまうくらいの情熱をぶ  
つけて作品をつくっている。

あたしは鏡の前に置かれた律のイラストを見た。両サイドの髪をあごの長さにして襟足を刈り上げた、メリハリのある前下がりのボブだ。リュウキュウキンバトという鳥からイメージをしたらしい。

両耳にかかる髪を翼に見立て、熱帯の森の木々のように深い緑色をベースに、毛先半分を染める。光を受けたときのきらめきを表現するために、細かな濃淡をつけている。翼以外の部分は黒髪だから、緑がよく映える。

律はこの日のために、ウィッグを使って何度もカラーの練習をしてきていた。ユウさんにもアドバイスを求めたらしいけれど、さすがに彼は、それがあたしの新しい髪型になるとは思ってもいないだろう。

カットを終えて一度目のブリーチをする。二度目のブリーチは細かい毛束を規則的に拾うウィービングだ。それを洗い流すと今度は用意したカラー剤を、キャンバスに絵でも描くように刷毛でのせ、丁寧に揉み込んでいく。

律は知らない。それがあたしの悲しみさえ塗り替えてしまうことを。

「あたしこの鳥見たことない。島にいるんでしょ？」

「今度見に行く？ 必ず見られるかわからないけど」

「あたしを見たら仲間だと思って、森から出てくるかも」

くだらない冗談に、いつも仏頂面ばかりの律が笑った。

薬剤を流して髪を乾かす。鏡に映るのはカナリアも驚くような派手髪のあたしだ。濃淡のついた緑色の髪、左右に首を振ると翼の部分がきらきら光って見える。

店を掃除してから、律と一緒に店を出た。その瞬間から、道行く人の視線があたしに突き刺さる。

「目立ってる。しかもあたしだけ」

「そう？」

「でも気に入ってる。これはあたしだけの特

別な髪型だもの」

律が急にあたしの右手を握ってきた。これなら恥ずかしさも半分ということだろうか。手のひらから律の体温が伝わってきて、心臓がうるさい。

横顔を見上げると彼は目を逸らす。律にも恥ずかしいなんて感情があったのかと、あたしはなぜか嬉しくなった。

帰り道、律が家の前まで送ってくれた。手を振って楽しい時間に別れを告げたとたんに、現実が戻ってくる。

祖母はあたしの髪を見てどんな反応をするだろう。言い訳のひとつも思いつかないまま、扉を開けた。

「ただいま」

玄関に入ると、魚の焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。台所の祖母は振り返りもせず「おかえり」と、夕飯の支度を続けている。

「ねえ、おばあちゃん」

あたしは魚焼きグリルを覗く祖母のすぐ隣

に立った。まるで見てもらえず、もう一度声をかける。祖母はようやくこちらに顔を向けた。

「なにその髪は」

「染めた。でも学校が始まるまでにはちゃんと戻すから」

祖母はため息をひとつ吐き出すだけで、すぐに目を背けた。

食事中もずっと、テレビに映るタレントだけが明るい笑い声を上げていて、あたしと祖母に会話は無い。世間体を気にする祖母には腹立たしい気持ちがあるのだろう。それでもあたしは、律に髪を染めてもらったことを後悔していなかった。

「明日は家にいな。白髪染め買ってくる」

「あたし戻さないよ。さっき言ったし、夏休み終わるまでには戻すって。律ともちゃんと日にちを決めてる」

「受験もあるのにそんなことしてどうすんだ。

瑠花は頭おかしくなったと思われてるよ、あ

の男と付き合い始めてから」

「そう思いたい人は、思えばいい。あたしは気にしないから」

食事を終わると、あたしは自室に閉じこもった。話をしたこともないのに、律の何を知ってあんな言い方をするのだろうか。あたしにはわからない。

その晩、勉強を疎かにする気はないということを実証したくて、夏休みの宿題をやり始めた。

数学の演習問題を最後まで終え、机に伏して仮眠をとっていると、リビングからの話声で目を覚ました。祖母が誰かと電話をしているようだった。

「まだ十時前か」

身体を伸ばして、次の教科に取り掛かろうとしたとき、机の上に緑色の毛束が落ちていることに気がついた。あたしは反射的に髪に触れた。律のつくった翼がない。

あたしは部屋を飛び出して、勢いそのままに

祖母の肩を突いた。

「なにした」

受話器を落としても動揺するそぶりも見せず、祖母はあたしを真正面から睨みつけてきた。

「周りがどれだけ瑠花のこと心配してるか知らないから、そんな頭にできるんだ」

「律がつくった作品を壊した」

「ここは東京じゃない。周り見てどうして自分だけがおかしいって気づかない？」

「おばあは人目ばかり気にして、あたしの気持ちなんてぜんぜんわからうとしてくれない。どうしよう、あたし律にもう会えない」

「だったらほかの美容室いきな」

祖母はぴしゃりと言い放ち、椅子から立ち上がった。

「いかない」

「なにが不満なんだ、瑠花は。まだ反抗期か」

「あたしは反抗期なんかじゃない。言ったじゃない、夏休みの間だけだって。あたしがあ

たしらしく生きることの何が悪いの」

「そんなにここが気に入らないなら、東京帰って父ちゃんのとこいけ」

あたしは何も言い返すことができずに、家を飛び出した。

学校を通り過ぎると、無意識に律との帰り道を辿っていた。丁字路に差しかかると遠くから、波の音が聴こえてくる。

震えるほどの怒りはいつの間にか涙に変わって、頬を濡らしている。あたしの足はバード・オブ・パラダイスに向かっていた。ブラインドは降りているが、店の中には灯りがついている。あたしは恐る恐る扉を開いた。

店の片付けをしていたユウさんは驚きながら振り向いた。あたしに気づくと、目を優しく細めた。

「まずはどうぞ。いろいろと事情がありそうだけれど」

セット面の回転椅子を勧められて、あたしはそこに座る。鏡に映る自分の髪をあらため



て見た。翼の残骸は、左右にまだ残っている。

「さて、どうしようかな。律を呼んで直してもらおう？」

あたしは首を横に振った。

「きっと律がこの髪を見たら、悲しい思いをするから」

「そっか」

ユウさんはワゴンを引いてきて、シザーケ―スを取り出した。あたしの首に白いタオルを巻いて、その上からカットクロスをかけて準備する。

「カラーの残つてるところを全部とると、だいぶ短くなるね。染め直してもいいんだけど、一回明るくしてるから、色落ちしやすいんだよな。カットでどうにかしようか」

粗目のコームを髪に通して唸る。ヘアカタログをぱらぱらめくり、その中に何も見つからなかったのか、今度はメモ用紙に髪型を描いてくれた。スタイル画の描き方もユウさんが教えたのだろうか、律の絵と線が似ている。

「襟足と耳回りが短くても、シルエットに丸みを残すと女の子らしさが出るから」

あたしは頷いた。ユウさんには申し訳ないけれど、キンバト以外の髪形なんてどうでもよかった。律がどんな想いであの髪型をつくってくれたのかを考えると、心がちぎれてしまいそうだ。

ユウさんは色の残った部分に、縦に缺を入れていく。緑色の髪がカットクロスの上にはばらばら落ちてきて、あたしはそれを手に取った。自由の翼は完全にもがれてしまった。

彼は缺を持った手を、膝の上に下ろした。

「おうちの人に怒られて、自分で切っちゃった？」

嘘をつくことも、本当のこと言うこともできずに、あたしはただ黙り込む。

「瑠花ちゃんがこの島に来る前に、これ以上心が傷つけられることがないようになって、色んな人に話していたみたいだよ」

あたしがここに来る前に、祖母が念入りな

根回しをしていたことは想像がつく。学校で母のことに触れてくる人が誰もいないのも、そういうことだ。それなのに心配をかけることばかりをして、許せない気持ちがあるのだろう。

「でもあたし、髪を染めたこと謝りたくない」  
祖母に頼らなければ生きていけないのもわかってる。けどあたしにとっては、前を向くための儀式でもあったのだ。

「ごめんね、悲しい思いをさせてしまった。僕も少し、律のことを自由にさせすぎていたかな」

その言葉を聞いたら、一度は引っ込んだはずの涙が目に滲んでくる。あたしは手のひらに握りしめていた緑色のかけらを、ポケットの中にそっとしまった。

ユウさんはカットを終えると、合わせ鏡で後ろ姿を見せてくれた。

「どう、ちゃんと可愛くなったでしょ」  
できる限り長さを残してくれているけれど、

元々襟足を刈っているのに横の髪まで短くな  
ってしまったから、後ろ姿は少年のようだ。

「ショートカットが似合うのは美人の証」

「うそ」

「似合ってるよ、頭の形もいいし。律がモデルに目をつけただけある」

カットクロスを外されて、あたしは椅子から立ち上がった。鏡に映っているのは知らない誰かだ。

「家の電話番号教えてもらってもいいかな。おうちの人に電話をしておきたいから」

メモ帳を差し出されて、あたしはそこに自宅の電話番号を書いた。ユウさんは子機とメモ帳を持って材料室に下がった。しばらくして話し声が聞こえてくる。

頭がくらくらする。あたしは待合のソファに座って、背もたれに頭をつけて天井を見上げた。

中学を卒業したら島を出て、それから髪を染めたのなら、祖母は何も言わなかっただろ

う。だけどその半年がどうしても待てなかった。今このときの気持ちを、何よりも大切にしたいと思うことの何がいけないのだろう。たぶん祖母は、あたしの疑問に対する答えなんて持っていない。学校の先生も、ユウさんも。みんな。

感情を捨てて大人の望むいい子を演じていれば誰からも愛されて、周りのみんなも笑顔でいられて、あたしもいつかそれに流されて、これで良かったのだと納得するのだろうか。もし律と会わなければ、あたしはそんな半年にも満足できたのかもしれない。けどもう無理だ。将来のために今を潰されてしまったら、明日だってもう見えない。

どんな話をしているのか、ユウさんはなかなか材料部屋から出てこない。

店の扉が開いてあたしは身体を起こした。練習をしにきたのだろう、Tシャツとスウェット姿の律だ。短くなったあたしの髪を見て、言葉をなくしている。

律は真っ直ぐ奥の部屋に向かったけれど、電話中のユウさんに追い出されたのか、ふらふらと戻ってきた。

あたしの隣に座って、宙を睨みつけている。  
「律、ごめん」

ポケットからそっと、緑色のかげらを出す。律はそれをまともに見ることもなく、あたしの手を叩くようにして床に払った。舞うことすらできないまま、羽根は落ちていく。

「瑠花から離れたら、なんの価値もない」  
冷たい言葉が胸に刺さる。そんな言い方になっってしまうのは、これがあたしのためだけの髪型だったという証なのだ。いつでも自分の気持ちに誠実な律に憧れていたはずなのに、今のあたしにはそれが苦しい。

翼を失ったとたんに、何も言えないだめなあたしに戻っていく。

ユウさんが材料部屋から出てきた。子機を戻すと、受付カウンターの引き出しから車の鍵をとった。

「ちょっと瑠花ちゃんのこと送ってくるから、律は店で待っていてくれる？ どうして瑠花ちゃんが髪を切るようになったのか、考えてみて」

律は面白くなさそうな顔のまま黙り込んでいたけれど、ユウさんは構わずにあたしを外に連れ出した。

「律のこと怒らないでください。髪をやって欲しいって、頼んだのはあたしだし。スタイル画見せてもらってどうなるかもわかってたし」

「興味を持ったいろいろなこと、とにかくなんでもやってみたくなる年頃なんだよなあ」

自分の過去を思い返しているのだろうか、ユウさんは力のない笑みを浮かべた。

「でも、おばあにはそんな関係ないってか  
んじ」

「別にグレたわけじゃなくて、人よりちょっと好奇心が強いだけなんだけど、そういうのも直接瑠花ちゃんと話をした人しかわからないな

いし。いろいろな経験があるからこそ、心配しすぎてしまうんだろうね」

祖母はきつと、髪を切ったことを愛情として受け止められないのが悪い、そういう風に考えているのだろう。

ユウさんは家の前まであたしを送り、祖母に向かつて深々と頭を下げた。それを軽く受け流して扉を閉めると、祖母はあたしに険しい表情を向けてきた。目に涙がにじんできて、あたしは部屋に閉じこもった。祖母はその晩、一切あたしに話しかけようとはしなかった。

自室に閉じこもったまま夏休みを過ごし、最初の登校日、あたしは学校を休んだ。

日に日に長くなっていく祖母の朝の祈りを、ぼんやりと見つめているうちに、激しい怒りは薄れていく。食事の時には二言三言、祖母と会話もしている。けれども、いつになっても上手く笑えない。

実優が心配してメッセージを送ってきてく



れた。クラスメイトたちもあたしを元気づけようと、それとなく連絡をくれるけれど、元気なふりをして返事をすることもできず、あたしはスマートフォンを落とした。

学校を休むことに罪悪感があって苦しい。学校に行って何もなかったように笑っているのはもつと辛い。傷口の膿は熱帯の狂ったような湿気の中、広がっていくばかりだ。

翌日も休むと、夕方になってインターホンが鳴った。ドアスコップから外を覗くと、ここにはあたしよりも短く髪を刈った律がいた。学校帰りなのだろう、制服姿だ。落ち着かない様子で髪を触っている。あたしは扉を開けた。

律は鞆からバインダーを取り出して押しつけてきた。休んでいるあいだ授業のノートをとってくれていたらしい、歪んだ文字がぎつしり並んでいる。

「夏休み中、何回も電話しようかと思ったけど、何を話しているのかわからなかった」

無遠慮に目の奥を覗きこむ律から逃れよう

として俯くと、彼はあたしの腕を引っ張った。

「瑠花、一緒に来てくれる」

「どこに？」

律はいつもマイペースだ。ユウさんのように優しい言葉なんてかけてはくれないし、話すことはただ真っ直ぐだ。けれど彼は何も取り繕ったりしないから、あたしも作り笑いなんてしなくていい。

服を着替えて、あたしは久しぶりに外に出た。

連れてこられたのはバード・オブ・パラダイスだ。今日は店にユウさんがいないのかと思えば、極楽鳥花の鉢は表に出されて、緩やかに吹く風にそよいでいる。営業中のようなだった。

ユウさんにあたしを呼んでくるように言われたのだろうか。どんな話をされるのか考えながら店に入って、あたしは驚いた。

祖母がセット椅子に座っている。カットク

ロスの上に白髪之交じた長い髪を下ろして。

「なにしてるの」

あたしの髪を切ってしまったから、自分の髪を切って償おうとでもいうのだろうか。ずいぶん今更だ。時間が経って薄らいでいた怒りが、腹の底から呼び起こされて熱い塊になっっていく。

「そんなことしたって意味ないよ。あたしの髪はもう戻らないんだから」

ソファに座ろうとすると、ユウさんから缺を渡されて戸惑った。

「やっpegらん。たぶん、瑠花ちゃんが切るのがいい」

「どうなったって知らないから」

あたしは祖母の細い髪を掴んで、怒りをぶつけるように肩の上で缺を入れた。背中を滑ってばさりと髪が落ちる。くせで髪が持ち上がり、まっすぐ切ったはずなのに、カットラインはでこぼこだ。

なにかとんでもないことをしてしまったよ

うな気持ちになり、あたしは目で律を探す。

「ごめんな、瑠花」

祖母は目を瞑ったまま、ぼつりとつぶやいた。

その言葉を聞いたとたん、張り詰めていた気持ちが切れそうになって、唇が震えた。

髪が切り落とされたときに魂まで失くしてしまっただのか、いつもは威勢のいい祖母が小さく萎んでいた。母の葬儀のとき、どこからともなく現れて全部を取り仕切る姿を見たときには、強くて、自分の娘の死すら動じない人なのかと思っていたのに、別人のようだ。こわばった指をリングから引き抜いて、あたしは鉢をワゴンの上に置いた。

「あたし、謝らないから」

声を張り上げると、祖母は「それでいい」と静かにため息をこぼした。

これでやっと自由になることを認められた。喜ぶべきはずなのに、あたし自身がその感情を受け入れられずにいる。

「代わりますね」

ユウさんがあたしに、隣のセット椅子を勧めてきた。身体を祖母の方に半回転させ、カットを見守ることにした。

「十二年ぶりですよ、髪を切るのは」

髪形を決めてカットが始まると、祖母は鏡に映るユウさんを見つめて話し始めた。

最後に祖母の切ったのは母だったようだ。幼いあたしを連れて一度だけ島に帰ってきたときのことらしい。それからずっと鋏を入れずにいたのは、その髪が唯一の繋がりのように思えたからだ。

祖母はあたしと同じように、髪に募った想いに継りながら生きていたのだ。あたしよりも遥かに長い時間、この島に母が戻ってくる日を待ちながら。

「いつかはちゃんと話ができたらって、思ってたんだけど。そのいつかを待ってるうちに、娘が逝ってしまおうとは思わんでしよう」

ユウさんに向かって想いを吐き出していく

うちに、祖母の表情が和らいでいく。

支えにしていた大切なものを、あんな風に切り落としてしまった後悔であたしの胸はつぶれてしまいそうだった。あたしはどうして、自分だけが悲しいのだと思ってしまったのだろうか。祖母の強さが、あたしを守るための優しさだということをおかろうともせずに。

長い話を聞きながら、ゆっくりとカットを終えると、ユウさんは合わせ鏡で祖母に後姿を見せた。

「どうですか、表情が柔らかく見えるでしょう」

トップに自然なボリュームをつけ、襟足をすっきりと締めた、くせを活かしたショートカット。祖母は髪を触りながら、別人のようになっただけなのに、戸惑っている。だけど、長年の悲しみまで背負い込んだロングヘアよりもずっといい。

「どう思う」祖母があたしに訊いてきた。

「似合うよ、すごくいい」

あたしが声をあげると「そうか？」と祖母は首を傾げた。ユウさんのそばでカットの研究をしていた律が祖母の後ろに回り込み、鏡越しにその髪を見つめている。

「眉間のしわもうまく隠れてる」

律がいつもの調子でつぶやくと、祖母は勢いよく振り返った。

「はあ？」

祖母はたぶん今、眉間にしわを寄せているけれど、つくりたての前髪が隠してくれているから怖くない。ユウさんと律も同じことを思ったのだろう、あたしたちが笑うとついに祖母まで笑いだしてしまった。

あたしや律に何かあったとき、助けるのは祖母やユウさんのような大人だ。何かしてしまったとき、それを許して受け入れてくれるのも。

それならば、たくさんの後悔を抱えたままの大人のことを誰が救うのだろう。あたしは母の代わりに祖母を許し、分かり合えないま

ま二度と会えなくなってしまうた二人を繋ぐために、神さまから呼ばれたのかもしれない。

祖母の髪を仕上げまで見守ったあと、あたしはまた律に連れ出された。

いつものビーチはそろそろ夕暮れどきだ。暑さのやわらいだ砂浜で、カメラを構えた観光客たちが、太陽が海に隠れるタイミングを待っている。

「髪の毛ってその人の心の状態がいちばん現れやすいんだって。苦しいとか辛いとか、本人さえ気づかないことも、髪には全部出るんだって。美容師はそういういびつな心も整える仕事なんだってユウさんが言った」

あたしは淡々と語る律の横顔を見上げた。律の手があたしに触れる。

「おれはそれを聞いて、美容師にはなれないなって思ってたけど。でも今は人に触れることで誰かの抱えてる、そういう気持ちをわかりたいと思う」



水平線を見つめる真っ直ぐな目。もしかしたら母も、そんな思いがあつて美容師という仕事を選んだのではないだろうか。もう答え合わせをすることのできない、母の気持ちに想いをはせる。

あたしはいま、母が島を出たときと同じ十五才だ。でも、母とあたしは同じじゃない。あたしは、母がこの島で見つけられなかった大切なものを、見つけられるような気がしている。

「瑠花。こればあちゃんか」

律はあたしに緑色の毛束を差し出してきた。祖母に切られて、捨てられてしまったと思つていた、あの翼を。怒りながらもとつておいてくれたのだ。不器用な愛情に胸がぎゅっとなる。

母を失つて、真っ暗な穴の中にいたあたしを救い上げてくれた大切な翼。

律に髪を切ってもらったとき、この翼があたしに自由を与えてくれたのだと浮かれてい

た。だけど結局あたしは、他人の翼で夢を見ようとしていただけなのかもしれない。

あたしはそっと耳元の髪に触れた。

一ヶ月経ってもなかなか伸びない、少年のようなショートカット。飾らない、特別な翼も何も持たない、ただのあたしだ。

あたしと律は砂浜の上に靴を脱いで、どこまでも続くエメラルドの海に足を浸した。翼を握った右の拳を前に突き出すと、律がその上に手を乗せた。握りしめたてのひらを夕暮れのせまる空に向ける。

遠く、遠く流れて、あたしの想いは母のいるところまで届くだろうか。

「せーの」

そのまま指をほどくと、緑色の翼は風に舞って、空高く飛んでいった。

了